

2021 年度の東京蜘蛛談話会行事

春の総会例会、全ての採集観察会、夏の合宿は中止といたします。

冬の例会につきましては現時点では保留とし、
9月発行の通信 163号で改めてお知らせします。

入退会は：

事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp
通信の原稿締め切りは、4月末、8月末、12月末です。

KISHIDAIA 原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

ファイルサイズが大きくてメール添付できない時には、ドロップボックスやグーグルドライブの転送機能・共有機能や、宅ふぁいる便やデータ便などの転送サービスをご利用ください。(これまで利用していた Yahoo Box は、アップロード機能を廃止してしまいましたので利用できません。)
キンダイアの原稿締め切りは、6月末日と12月末日です。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 2000 円、学生 1000 円です。

(会計状況の好転により、**2015 年度分より当分の間、会費を値下げし、年会費を一般会員 2000 円、学生会員 1000 円とします。**)

会費は郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。
会費のことは：会計担当 須黒達巳
〒150-0013 渋谷区恵比寿 2-35-1 慶應義塾幼稚舎
TEL : 080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

多摩だより (3) 小下沢の宝石たち

新海 明

中央本線で松本方面に向かう電車に乗ると、東京都の西のはずれにある高尾駅を過ぎ、しばらく進むと小仏トンネルに入る。その少し手前で車窓の右手の奥に中央高速の陸橋が数本見える。ここをくぐって林道が沢筋の奥に延びているのが分かる。目を凝らしていないと見落としてしまうかもしれない。

1968年のことだ。私は高校1年生になったばかり、生物部の新入生歓迎を兼ねた春の採集会が、ここ小下沢で行われた。まだ、中央高速道路は工事の真っ最中だった。高尾の駅前から出るバスに乗って裏高尾の日影というバス停で下車した。この付近の事情に詳しい方なら、小下沢に行くならば日影で降りては「だめだろう」と思うかもしれない。実は1968年の春までは日影のバス停から小下沢林道に入るトンネルがあったのだ。今でも小下沢の溪流から流れ出てくる沢水を集めるレンガ造りの水路が残っている。当時は、この水路上に板敷があり、景信山方面に行く登山客がここを歩いて小下沢へと入れたのだ。この年の夏にはすでに板敷は取り払われていたので、私もこのトンネルを通ったのは1度きりだった。この日の採集で、何よりも印象深く記憶に残っていたのは、景信山への入り口であるザリクボで大量のホシミドリヒメグモに出合ったことである。まだ成体にならない若いクモだったが、その色彩の変異に感激した。この時に調べた記録は、かつてキシダイアに再録したことがあった(新海2014, K103)。この時、記録のためにたくさんのホシミドリを採集してしまった。翌年になって追加の調査でザリクボを訪れるとホシミドリは激減していた。この話は機会あるごとに何度も述べた。私はホシミドリの激減の理由は「採集してしまったからだ」といたく後悔したものだ。腹部は淡い黄緑から褐色で、その上に白いクリームが塗られ、背には黒い点が規則的に入っている小下沢の宝石の1号は、このホシミドリだった。

1968年の夏休みに入っすぐの頃だ。既に日影のトンネルの板敷はなくなっていた。私は、そのころまでトリノフンダマシ類に一度も出合ったことがなかった。「四畳半にもなる大きな円網を張っている」という先人の情報を頼りに小下沢の林道の空間に目を凝らした。すると林道の上に大きな円網が見えた(昼間だし、大きさは四畳半には到底みたなかったが)。その中央には丸っこいクモがおり、逆光のシルエットはトリフンのように見えたのだ。杉の長い枯れ枝を伸ばしてクモを採った。管ビンに入ったクモは、なんと黒かった。これは図鑑で見かけたクロトリノフンダマシ(当時は、これがシロオビトリノフンダマシの変異型などと知る由もない頃だ)かもしれないと興奮して家に持ち帰った。私にもこんな珍種ばかり狙った時代があった。クモを見た兄は「これは最近になって八木沼先生が記載したハラビロミドリオニグモで、色彩変異があり黒色型だ」と教えてくれたものだ。がっかりはしたが夏の小下沢で出会った2番目の宝石はこのハラビロミドリオニグモだった。

私はなぜかこの時に、黒いハラビロが採れた小下沢には絶対にトリフン類がいると確信した。理由は・・・と聞かれたら「ただそんな気がした」だけだった。既に夏休みに入っていたので2~3日後に再び小下沢に向かったが、この時に兄からたった一つのアドバイスもらった。「昼間は葉の裏にとまっているから、葉裏を探せ」だ。

私の初めてのトリフン採集はあっけないものだった。その日、小下沢の杉に覆われた林道入り口からわずか20メートルほど歩いたところで、キブシの葉裏にとまっていた

赤い宝石を見つけたのだ。アカイロトリノフンダマシ、さすがにこれは見間違えようもなかった。兄すら、その当時には採集したことがなかった（これも驚きだが）、トリフンを探ってしまったのだ。それもアカイロである。鼻高々になったことも分かっていただけのだろう。小下沢での3番目の宝石は赤かった。

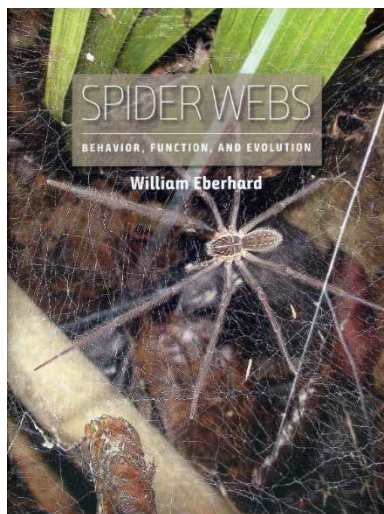
その後、この小下沢ではオオトリ・トリ・クロ（シロオビ）・ツメワケ（アカ）などほとんどのトリフン類が見ることができ、私にとってのはじめてのクモ聖地となった。さらに、さらに後年になるが、ここ小下沢ではムツトゲやワクドツキジまで採集されている。またいつか、夏になったら久々に裏高尾のクモの聖地・小下沢に出かけてトリフン類を探しにぶらぶらと歩いてみたいものである。



新刊紹介



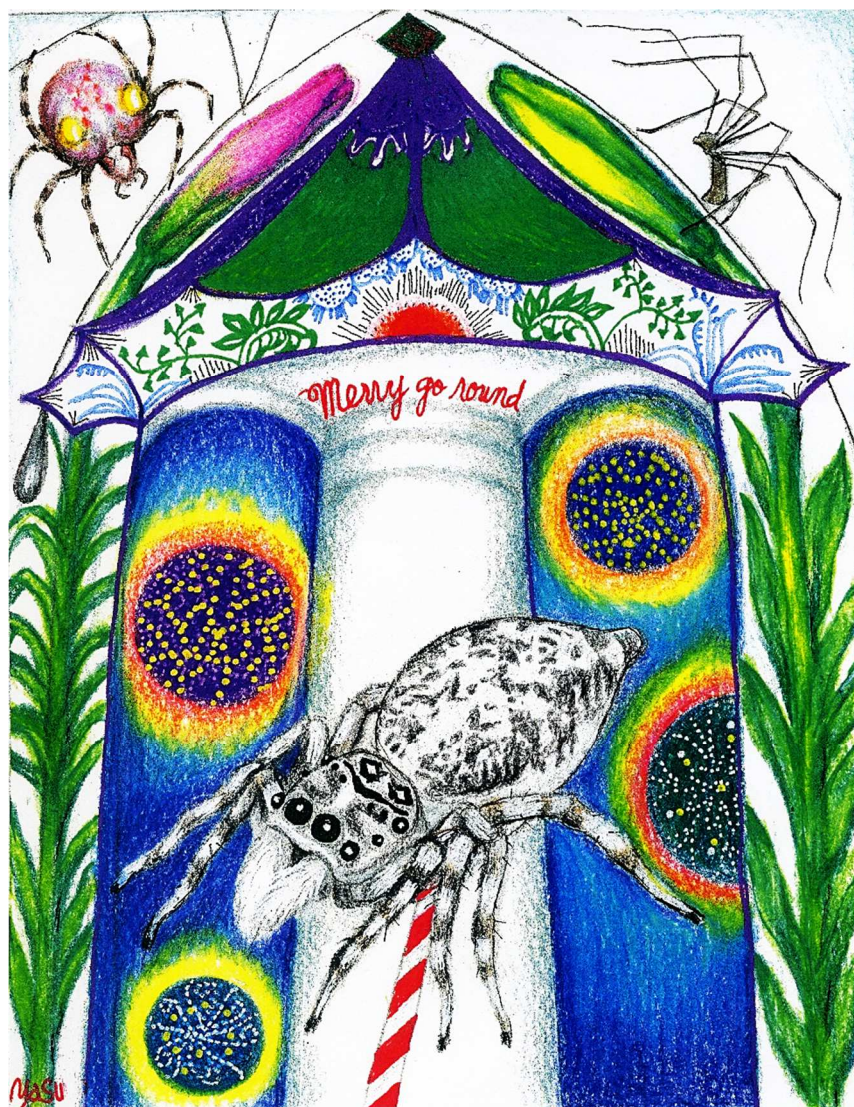
ノーマン・プラトニック編
奥村賢一・小野展嗣監修
西尾香苗訳
世界のクモ
ISBN : 978-4-7661-3399-8
グラフィック社
255p. 3900円+税



William Eberhard
Spider Webs
ISBN : 978-0-226-53460-2
The University of Chicago Press
658p. US\$75



海洋と生物 252号
ISBN : 978-4-909-11932-2
生物研究社
1980円



外へ

加藤康子

いつからだったろう わたしは眠っていた
雪は見なかった 眼を閉じていたから
風の音は聴いた
急降下し、旋回し 木の葉を追いまわし
ふいに 途切れて どこかに消えた

人の声がする
低い唄れた泣き声で
理不尽だ！と言っている
り・ふ・じ・ん・に遭遇したら？
わたしは虫らしく すばやく反応する
答えは、明らか
闘うか 逃げるか だ
私の生命の焦点までは短いのだ

ある日、気づいた
水の音が続いている ひたひた ひたひた
いつのまにか 大気はほんのりと色づいて
季節は循環していた。
えもいわれぬ 甘い衝動が体内をめぐる
ああー 足がムズムズする
喉元あたりに つきあげてくる至福感
壁が軋み ゆるんで 弾けた
誰かが 糸をほどいたのだ

ふくいくとした土の匂い
無秩序に放たれた生きものの息づかい
さあ
外へ！